

---

# 秘密からの恋

琉兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秘密からの恋

### 【Nコード】

N3836BA

### 【作者名】

琉兎

### 【あらすじ】

一目ぼれなんてあるわけないと思ってた俺が一目ぼれした。でも、その相手と関わることなく半年が過ぎた。そんなとき、俺は彼の秘密を知ってしまう。それが彼との関係を大きく変える。

【夕日よ昇れ】の榊原良介と檜山澪の話。なので【夕日よ昇れ】とリンクしたところがあります。

**\* 0 \* (前書き)**

これedyouやくリンク作品が揃いましたあ！

さらに執筆速度遅くなるかもですけど……許してくださいく  
— ) > —

その人を好きになったのは、高校生になってすぐ。入学式で、壇上の端に控えていたその姿を見たときだ。俺、檜山澪ひやまれいは前から二番目だったから、俺のところからよくその人の姿は見えた。世間的には一目惚れというんだと思う。今までそんなこと信じてなかったし、あり得ないと思ってたのに。なぜかその人から目が離せずにあった。なのに、一回もその人と視線が合うことなんてなくて。ただ、その入学式で名前は知った。

生徒会副会長、さかきばりょうすけ榊原良介。

当時高校２年生。なのにもかかわらず副会長を務め、成績優秀な彼は、まさに生徒の手本のような人だった。俺のところからはステージの裏も少し見える位置にいたから、そこでせいと会長になにやら注意をしていたのも見えた。そしてまた真面目な顔して式の進行を見守っていた。眼鏡の奥のその凛としたまなざしは、何を映してるんだろう。何が好きで、何が嫌いなんだろう。好きな人とか居るんだろうか。なんてことを式の間中考えていた。

でも、それ以降あの人に近づけることもなく、半年がたとうとしていた時だった。僕は偶然、彼の秘密を知ってしまった。しかもそれを知ったことをその場で彼にも知られ、他言するなどと注意していた。悲しいことに、それが彼との初めての会話だった。その後、彼は何かと僕に構うようになったけど、それはおそらく秘密をばらされないように監視するため。恋愛感情なんか彼にはない。だったら俺が好きにさせればいい。そう思ったその日から、俺は彼を良と呼ぶようになった。

**\* 1 \* (前書き)**

第一話です。

基本、透視点です。

２年生の春がやってきた。相変わらず、変化も何もない朝。いつも抱いて寝ているティディベアをわきに抱えて、洗面所に向かい顔を洗う。ティディベアをソファに置くと冷凍食品のパンをレンジで温める。大体自炊なんかしない。というかできない。テレビをつけて、朝のニュースを見る。といっても聞き流すだけ。要は部屋が静まっていなければならない。ほかほかの温まったパンを加えながら、カップにミルクを注ぐ。

食事を済ませて、制服に着替える。Ｙシャツを着てその上にクリム色のセーターを着る。ネクタイはあえてしていない。してなくてもそれほど注意をされないのは校則の緩さのおかげだと思う。その上にブレザーをはおって、洗面所に再び向かう。簡単に櫛で地毛の茶髪の髪の毛を梳かす。といっても、俺の髪の毛は癖毛だからどうしてもぼさぼさしてしまう。まあ、それも仕方がないことだからそれ以上の抵抗はしない。再びリビングに行き、ティディベアの横に置いてあるイヤホンを首にかけ、プレイヤーをブレザーのポケットに入れる。さらに通学用のかばんを持てば準備完了だ。

「行つてきます……」

ぼふぼふとティディベアに別れを告げ、俺は寮の部屋を出た。ちなみに、俺は一人で寮の部屋を使っている。これも実は良のせい。同室生に秘密をばらされるのを防ぐためらしい。何とも用意周到だし、そこまで俺の事を信用してないのかと悲しくもある。イヤホンを耳に当て、俺は学校の校舎へと向かった。

教室に入っても、誰ひとり俺に声をかけてくる人はいない。俺が誰も寄せ付けない、そんな雰囲気を出しているからだ、前誰かに言われた気がする。とくにクールを気取っているわけじゃないけど、

どうやらそう思われているらしい。だから別に俺の方からも声をかけようとはしない。窓側の一番前の席が俺の席。鞆を机の横にかけてイヤホンをしたまま机に伏せる。どうせ今日も、何事もなく過ぎてくんだろうな。今日は何回会えるかな。今日は何回話せるかな。今日は何回あの人の目に映ることができるかな。そんなことを考えてしまうのは、もう日常茶飯事だった。

「お、漣じゃん。どこいくんだ？」

昼休み、昼食も食べた後教室を出たところで青葉淳にあった。同じ二年で生徒会書記をしている。数少ない俺が話す人。俺に話しかけてくる人。イヤホンをしていてもその声はよく聞こえた。イヤホンを外しつつ、そのほうに振り向く。

「保健室、サボろうと思って。どうせ良にあえないし。教室いても暇」

「副会長なら会いに行けばいるんじゃない？」

「いい。じゃあね」

「暇なら今から体育館でバスケやんだけど来ないか？」

「……バスケ？」

「そ、暇なんだろう？」

「……仕方ないから行く」

「素直じゃねーの」

別に、スポーツは嫌いじゃないだけ。体動かしてるといろいろ考えなくて楽だし、もともと運動神経は悪くない。ただそれだけ。ただ無関心で、あまり熱中できないから部活には入ってない。そういえば、良は何かスポーツ得意なんだろうか。あまりそういう話はないからよくわからない。誕生日すら……知らないかもしれない。今度聞いてみようか。けど、教えてくれるかな。まだまだ知らない

こと多い。だから知りたい。秘密なんかより、良自身のこといっぱい知りたいのに、良は教えてくれない。あまり自分の事を話したりするのが好きじゃないみたいだし。知りたい。好きだから、知りたい。少しでも近付きたい。

「零　？どうかしたのかよ」

「あ……なんでもない、やろっ」

だめだ。良の事考えると、周りが見えなくなる。



**\* 1 \* (後書き)**

漣はどこかで書いた気もしますが素直じゃない寂しがりやなイメージです。ツンデレかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3836ba/>

---

秘密からの恋

2012年1月10日20時58分発行